
夕日

rio

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日

【Nコード】

N3778E

【作者名】

rio

【あらすじ】

蒸し暑い夏之夜にお姉ちゃんは死んだ。轢き逃げだった。お姉ちゃんが死んだ次の日にヒロさんはやって来た。

prologue

全てを壊し

全てを許し

全てを包み

そして

全てを消していく

そんな赤だった

あたしを壊して

あたしを許して

あたしを包んで

そして

あたしも消されていく

真っ赤に染められて

沈んでいく

赤い暗闇の中

善も悪も何もない。

ただ、赤いだけ。

お姉ちゃん

窓から夕日が差し込んで部屋の中を真赤に染める。

もしこの世の果てというものがあるのならこんな風に赤く輝いていればいいと思う。

全てを赤く呑みこむ光。

輪郭が溶けて、一つになって、最後はただの赤になるのだ。

それ以上ヒロさんは何も言わなかったし、私も何も言えなかった。部屋の中はかなり蒸し暑かったけど隣に座るヒロさんの体温のほろがさらに熱い。

あの日もこんな夕焼けだった。

お姉ちゃんが死んだ日も。

「ヒロさんが、お姉ちゃんを轢いたの？」

口が勝手に動いていた。

誰か知らない人の声みたいだった。

ヒロさんの体が一瞬ビクツと硬くなって、そして彼はゆっくりと口を開いて胃の中ものを吐き出すように云った。

「そう、俺が轢いた。俺が…彩ちゃんを殺したんだ。」

ヒロさんは爪が食い込んで今にも血が流れてきそうなくらい拳をきつく握っていた。

あんなに大きかったヒロさんがとても小さく見える。

小さく震える肩と血の気が引いたその顔を見ていたら涙が出てきた。そのまま流れにまかせておいた。

ヒロさんは泣き出した私をチラリと見てからポツリと話し始めた。今にも泣き出しそうな顔だった。

”太陽みたいな笑顔”はもう二度と見られないかもしれない。

「あの日の夜中、俺は一人であの道を走っていたんだ。周りに車が一台もいなくてやけにひっそりとしていた。なんだか気味が悪くていつもより飛ばして走ってた。

街灯もなくて本当に真暗だった。

すると目の前に突然何か現れて…。

俺はあわててブレーキを踏んだけどすぐに何かがぶつかった嫌な音と感触がした。

人を、人間を轢いたんだってすぐに解った。

顔が見えた。

女だった。

その女の顔が、一瞬だけだけど、見えたんだ。最初は見間違いだと思った。

でも俺があ顔を見間違えるはずがないんだ。」

ついにヒロさんは泣き出した。

お姉ちゃんのお葬式のときのように、声を殺して苦しそうに泣いた。

お姉ちゃんは8月10日の夜中、走ってきた車に飛び込むように自殺した。

お姉ちゃんの死体の発見は朝になってからだった。轢き逃げされたのだ。

「俺は怖くなった。彩ちゃんを・・・、俺が彩ちゃんを殺したんだって。」ヒロさんは泣きながら続けた。

「しばらくは放心状態だった。

ただど急に、自分は何もしてないって思えてきた。

さっきのは夢だったんだって。本気でそう思った。

俺はすぐにその場から走り出して、家に帰って風呂にも入らずに寝た。

一晩寝て、次の日起きたら何もなかったことになってるんじゃないかって。

だけど朝になって目が覚めてもやっぱりまだ怖かった。

一度、あの場所に行ってみたら彩ちゃんの死体も血の跡も何もなかった。

やっぱりあれは夢だったんだってほっとしたけど、でも何かがまだ不安だった。」

「それで、この部屋に来た？」あたしは口を挟んだ。
再びちらりとヒロさんがこちらを見て、またすぐに下を向いた。

「ああ・・・。彩ちゃんの部屋に行こうと思った。

今すぐ彩ちゃんに会いたかった。

彩ちゃんに会ったら、告白しようと思った。

3年間ずっと好きだったって。」

ヒロさんがウチに来たのはたった1週間前だ。

なのにもっと昔だったような気がする。

「お姉ちゃんは昨夜から帰ってきてません。」とヒロさんに告げた

ときの青ざめた顔。

一気に血の気が引いていったあの顔と、

「お姉さんが帰ってくるまでこの家で待たせてもらえないか。」と熱心に頼み込んできた姿に、

あたしは単純に ああ、人ってこんなに人に恋できるんだな と感心した。

羨ましいとさえ思った。

誰かにこんなに心配してもらえるお姉ちゃんが羨ましい。そんな2人がすごく素敵に見えた。

ヒロさんを部屋に招きいれた瞬間、家の電話が鳴った。

お姉ちゃんの死を告げる叔母からの電話だった。

お姉ちゃんは難しい恋をしていた。

相手は会社の上司の人で奥さんも子供もいた。

「不倫でもなんでもいいの。」とお姉ちゃんは悲しそうに笑った。

その人と関係が始まってからお姉ちゃんは朝に帰ってくることが多くなった。

ひどく酔っぱらっていたときもあったし服がぐちゃぐちゃになっているときもあった。

何ヶ月か経った後は泣きながら帰ってくるようになった。

出かけない日は毎日のように電話で言い争っていた。

お姉ちゃんの部屋から聞こえてくる泣き叫ぶような言葉たち。どこかの昼ドラでしか聞けないだろうと思っていた言葉たち。

「捨てないで！」

「奥さんと別れてくれるって言ったじゃない！」

あたしはただそれを聞いて部屋の隅でじっとしてただけだった。

さらに時間が経つとお姉ちゃんはだんだんと穏やかになっていった。不思議に思つて「なんで？」と聞くと「あたしには素敵な友達が居てくれるから。」とお姉ちゃんは微笑んだ。

そいつ、お姉ちゃんのこと好きだな　とあたしは思った。

お姉ちゃんがこんなに静かになるまで根気よく彼女の話聞いたのだから。

「どんな奴なの？」と尋ねるとお姉ちゃんは楽しそうに答えた。

「図体はでかいけど、優しくて、笑顔が太陽みたいな人よ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3778e/>

夕日

2010年12月10日15時41分発行